

ボランティア養成研修会



令和5年6月3日（土）～6月4日（日） 1泊2日

○目的

青少年の体験活動を支援するボランティアに求められる知識・技能を習得するとともに、ボランティア活動の意欲を高める。

○参加者（対象及び内訳）

対象：ボランティア活動に興味のある高校生、
大学生、社会人

参加者：計30名（内訳：男性12名、女性18名）
（高校生：10名、大学生：16名、社会人：4名）



○事業の内容

※悪天候により、プログラムを変更し、一部は事後にオンラインにて実施。

（1）「野外炊事をやってみよう！」

（科目：ボランティア活動の技術）

企画指導専門職 高垣 信宏

当施設の野外炊事に関するルールだけでなく、指導者としての意識付けとなるような観点で注意事項を伝え、グループで協力しながらカレー作りに取り組んだ。



（2）「自然で遊んでみよう！」

（科目：ボランティア活動の技術）

事業推進係長兼企画指導専門職 高瀬 宏樹

当施設の自然物を使った3種類のアクティビティを体験した。参加者同士が楽しむ様子が見られ、今後のボランティア活動で実践してみたいという声が聞かれた。



（3）「子供たちの安全を守る知識を身につけよう！」

（科目：安全管理）

大東文化大学 スポーツ・健康学部 教授 中村 正雄 氏

子供たちとの活動中に起こりうるリスクや安全とのバランスを学んだ後、AEDを使用した心肺蘇生法を少人数のグループに分かれて演習を行った。



（4）「青少年の“今”を知ろう！」

（科目：青少年教育）

國學院大学 人間開発学部 准教授 青木 康太郎 氏

青少年を取り巻く社会や子供の体験活動の現状を学んだ。それを踏まえ、今後、青少年の成長を支える環境づくりのためにボランティアとしてできることについて考えた。



(5)「交流の家のボランティアについて知ろう」

(科目：青少年教育施設におけるボランティア活動)

当施設法人ボランティア6名

当施設で活躍する先輩ボランティア6名がボランティア活動の魅力や始めたきっかけなどについて話した後、各先輩ボランティアと自由に話ができるような場を設定した。参加者の不安や疑問を払拭し、今後の活動への意欲を引き出す時間となった。



(6)「交流の家について知ろう！」

(科目：青少年教育施設の現状と課題)

国立中央青少年交流の家所長 藤原 一成

これまでの日本の歴史における社会教育および青少年教育の意義について確認し、その中で国立中央青少年交流の家の成り立ちや存在意義について学んだ。



(7)「ボランティアってなんだろう？」 ※オンラインにて実施

(科目：ボランティア活動の意義)

ボランティア・コーディネーター 柴谷 紗良

社会教育現場におけるボランティア活動の意義や心構え、留意点について参加者同士の意見交換や職員の経験談等を交えながら学び考える場となった。



(8)「法人ボランティア制度について知ろう」 ※オンラインにて実施

(科目：青少年教育施設におけるボランティア活動)

ボランティア・コーディネーター 柴谷 紗良

法人ボランティア制度や法人ボランティアポータルサイトの説明をし、登録作業を行った。また、法人ボランティアとして活動する際の注意事項や事務手続きについて確認をした。



《参加者の感想》

- ・自然の中での体験の大切さやそれを安全に行うために注意すべきことなど、今回学んだことを今後のボランティア活動の場で試し、経験を積んでいきたいと思った。
- ・大学生や社会人など、普段関わる機会のない人とプログラムに取り組んだりコミュニケーションをとったりして、刺激的で新鮮だった。
- ・自身のスキルアップやボランティアについて知識を深めることができて良かった。

《成果と課題》

- 高校生、大学生、社会人等普段関わり合うことのない年代が混在するような班編成を行ったことで、参加者同士の交流が良い刺激となり、今後の活動に対する意欲につながる様子がうかがえた。
- 記録的な大雨のため、やむを得ず大幅な日程変更を行ったが、運営のサポートスタッフとして参加したボランティアや参加者を含め、全員が臨機応変に対応したことで円滑に事業を運営することができた。
- 多くの登録ボランティアに活動機会を提供できるよう、教育事業以外でもボランティアの活動の場を設定するなど工夫する必要がある。